

## －村史こぼれ話 15－

### 凧揚げ（たこあげ・いかあげ）

越後平野では、田植えが終わると三条や見附・今町や白根と味方では勇壮な凧合戦が繰り広げられる。昔は弥彦村でも田植えが終わると子どもたちは盛んに「イカ揚げ」をし、勢い余って畑に入って大人たちから叱られたものである。凧の語源はタコ・イカに似せたもので、足が4、5本あることから来ていると思われる（『大正時代の西蒲原郡方言』）。

凧は東アジアや東南アジアが起源で、日本へは平安時代以前に中国から伝わり、紙鳶（しえん）とよばれた。凧が一般に普及したのは江戸時代初期で、上方で流行し、またたく間に江戸にも伝わった。それがやがて各地に伝わり、各地の郷土凧を生んだ。

凧は単に子どもの玩具ではなく、初節句祝い・豊作祈願・年占いなどの意味をもつものが多い。凧揚げの時期も江戸は正月が盛んであったが、大坂では2月の初午<sup>はつま</sup>が中心であった。3月と5月の節句に凧揚げをする地方も多い。

国語研究所の『日本言語地図』の解説によると、ハタ（旗）タコバタ（たこ旗）の呼び名は、現在東北地方・南近畿・九州北西部・奄美大島に残っている。新潟県では「タコ」が頸城地方と山間地である南魚沼・古志・東蒲原地方の7郡、「イカ」が佐渡と東蒲を除く蒲原郡・岩船の6郡にあり、中間の北魚沼・刈羽・三島の3郡は2種の語の併用地帯となっているという。イカは近畿を中心に西は岡山県、東は北陸に伸び、新潟はその北限で、富山・石川の両県と同様タコとイカがまさに伯仲している。

三条市にある小林凧屋さんの店内にある凧は和紙に武者を描いた六角凧がほとんどである。「昔は『イカヤ』と言ったけど、東京方面の人にわからないので、今では『タコヤ』と名乗っている。この凧は畳めて携帯に便利、尻尾はつけなくて揚げる。子どもは親と一緒に買いに来るが、今は大人が和風インテリアとして買い求める人も多い」と話してくれた。



三条の六角凧

（参考文献：『新潟県の方言』 『日本民俗辞典』）

※当該地域をわかりやすくするため合併前の郡名を使用しています。